

色水面白い！ ～環境の工夫～

子どもが自分たちで創意工夫のできる色水遊びは、多くの園で楽しんでいる姿が見られます。また、遊びを楽しむ中で、混色や色の变化などの事象に気付き、その後の探究や表現といった様々な体験に広がります。この事例は、3歳児が使いこなせるようにと環境を工夫したことで、子どもたちは、色、音、匂いなどを自分たちで繰り返し楽しめる色水遊びを展開し、「科学する心」が育まれる体験に繋がっています。

社会福祉法人なのはな 菜の花保育園

3歳児

保育者は、「興味をもった遊びを、3歳児なりにじっくりと繰り返し楽しめるようにしたい」と願い、子どもたちが毎年楽しんでいる色水遊びに注目した。そして、「花を摘んだ手に色が付いた」出来事をきっかけに、保育者は子どもに寄り添いながら心を揺さぶり、子どもが夢中になって探索したり試行錯誤したりできる保育の工夫をした。



展開1 色水と出会う 4月上旬

保育の工夫

枯れたパンジーを摘んでいたAさんが、手に付いた色に困り、「手がばっちゃんになった」と言った。保育者は汚れを取り、「水に浸けてみようか?」と言い、水を入れたビニール袋を渡した。Aさんはビニール袋を受け取り、袋にパンジーを入れ、保育者と一緒に袋を揉んでみると色が出て、色水になった。

Aさんは驚き、仲良しのBさんに袋を見せて伝えた。Bさんが、「やりたい」と言い、Aさんと同様になると色が出た。それが次々と伝わり、多くの3歳児が、パンジーや桜などの花をビニール袋に入れ、色水作りに夢中になった。

5歳児が、「水は、ペットボトルに入れて使ったら、行ったり来たりしないでいいよ」と通りがかりに教えてくれた。**葉っぱできれいな緑色の色水を作ったDさんが、「できた色水を入れる容器が欲しい」と探して使う。**机には使う教材が揃ってきて、連日、子どもたちが色作りを楽しむようになる。ジュース屋さんなど、お店屋さんをする姿も見られるようになる

興味をもつ草花が園庭にあり、自由に遊びに使える。

子どもの訴えを受け止め、色が付く出来事から新たに興味を湧くように関わる。

子どもが扱いやすいビニール袋を近くに置く。

園庭に机を置き、じっくりと遊ぶ場を設け、ペットボトルや透明容器を選んで使えるようにする。

展開2 いろいろな色水遊び 4月下旬～6月下旬

アカカブを使って遊ぶ。浸けていた水が腐った臭いに驚く。アカカブの酢漬けを知り、真似て楽しむ。色水遊びに酢や塩を使い、繰り返し楽しめるようになる。レモン汁でも**色が変わることが分かり、草花の色水を作りいろいろ試すようになる。**

色水に使った花びらをガーゼに入れて、和紙に模様を付けたり、綿棒で絵を描いたりする。**思うままに探索し、いろいろ試しながら小さな変化に気付き、喜ぶ。**綿棒に色水の他、レモン酢を付けたり塩を付けてたりして、絵を試す姿もある。



レモン汁や酢、塩、レモン酢と同様、重曹に気付いて使い、自分たちで音や泡を楽しむようになる。**自分なりに扱いやすい容器を使い、いろいろ試しては、友達や保育者に見せたり音を聞かせたりする。**その後、給食に出る野菜や果物で試したいと考え、自分たちで皮をもらいに行き、使うようになる。



保護者からハーブで作る「飲める色水」を教えてもらう。レモン水で色の变化を試す。重曹などの扱い方に気を付けるものをもみんなで確認し合う。育てた野菜でジュースを作り色や味を楽しむ。

保育者のアカカブの漬物作りをきっかけに、子どもの興味が広がるようにと、草花の他に野菜を提示する。漬物の材料の酢や塩を使えるようにする。安全に扱い、探索する姿が活発になったので、レモン汁を環境に増やし、更に探索ができるようにする。より安全に扱えるソース用の卓上透明容器などの教材を工夫する。

色水で使い終えた草花を使い、表現遊びの場や教材を設定する。色水での体験が生きるように、使い慣れている教材を準備する。

家庭にある重曹を使えるように設定する。保護者の協力により、ハーブを使った飲める色水を体験する機会を作る。重曹を使った聴覚、ハーブによる味覚など、今までの触覚、視覚や嗅覚に加え、様々な感覚や感性で楽しめるように、教材や刺激を受ける機会を増やす。飲食してよいもの、口にしていけないものを、今まで以上に意識して使えるような環境を作る。

【考察】 3歳児が、花から出る色や色水に驚き、興味をもって発想豊かに遊びを楽しんだ。多様な探索ができる刺激や、使いこなせる物、じっくりと遊べる環境があることで、遊びが継続している。自分に関わることで変わる現象に気付く体験や、様々な教材を使いこなす技術を獲得する体験をする子どもたちは、「科学する心」が育まれる学びをしている。